

新沼窯跡(比企郡鳩山町)

しんぬまかまあと

ここは鳩山町泉井



ここが新沼窯跡見学会の会場







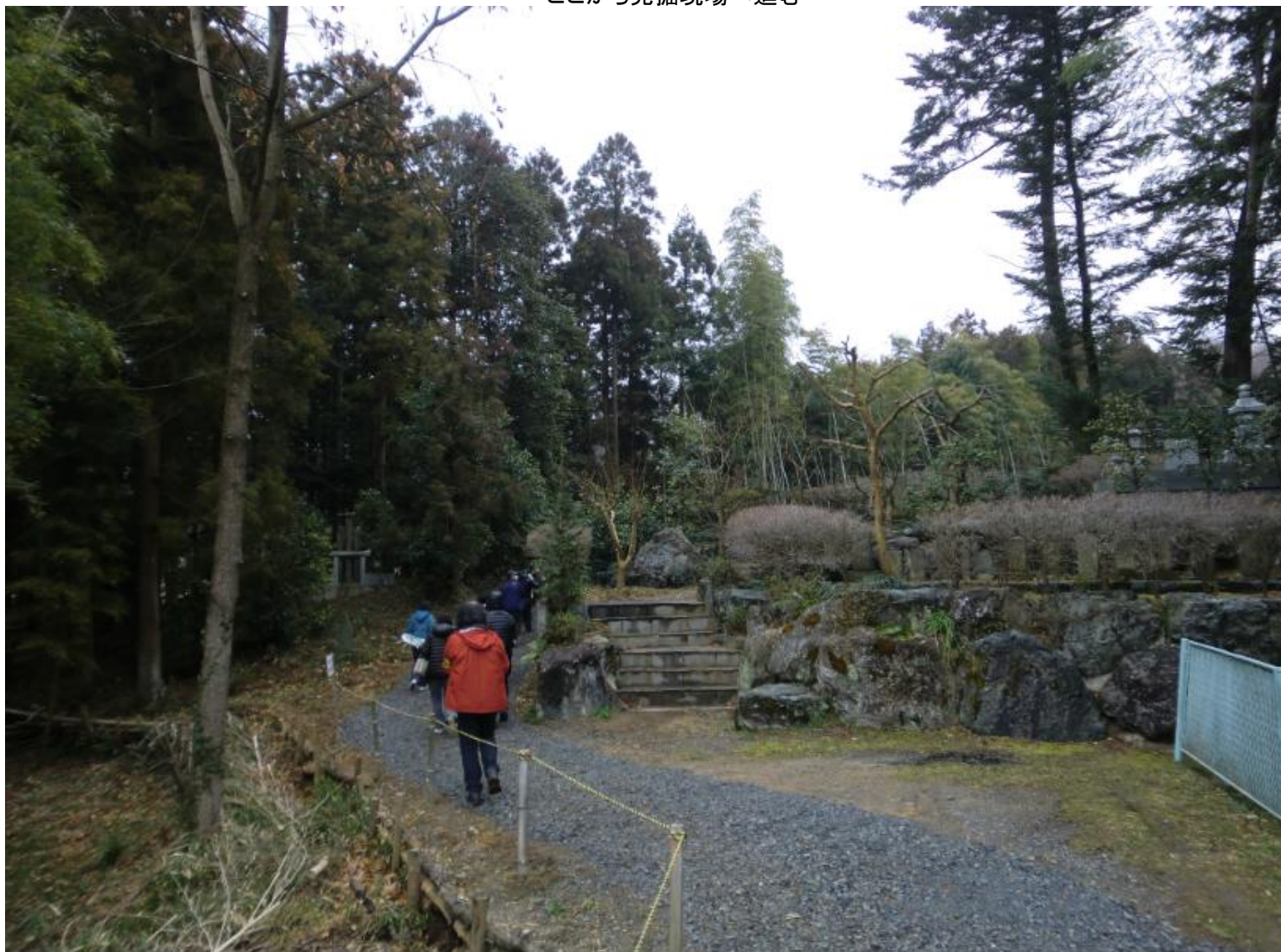








ここから発掘現場へ進む





この発掘現場から出土したさまざまな瓦



瓦塔の破片も出土している









さまざまな郡名入りの瓦も出土している





745 845
平瓦

745 845
丸瓦

さて、現地に進む





既に沢山の見学者がいる

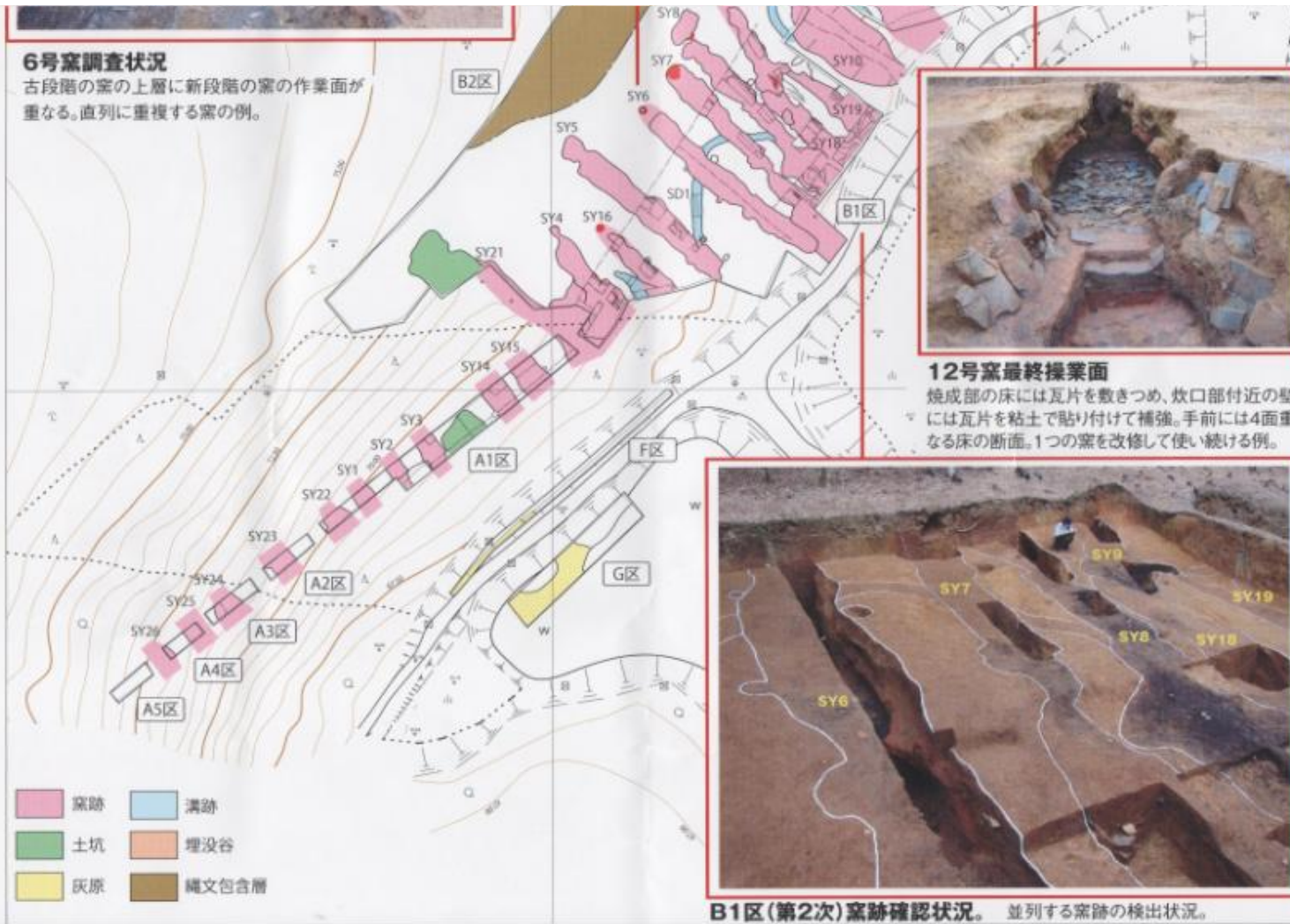


国内最大級の24基の窯跡が見つかった新沼窯跡の全体像



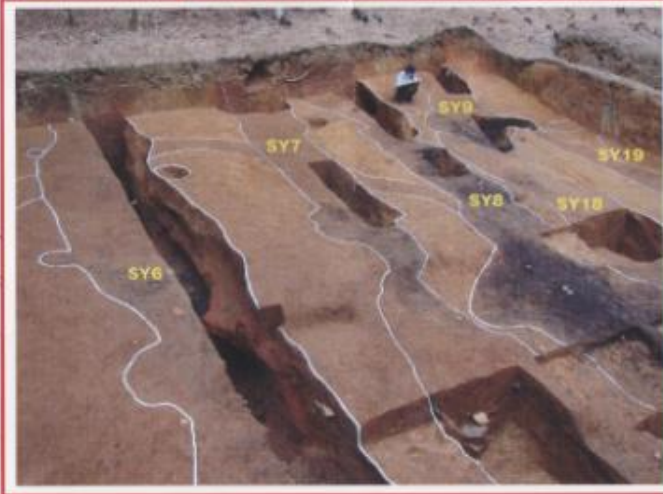
6号窯調査状況

古段階の窯の上層に新段階の窯の作業面が重なる。直列に重複する窯の例。



12号窯最終操業面

焼成部の床には瓦片を敷き詰め、炊口部付近の壁には瓦片を粘土で貼り付けて補強。手前には4面重なる床の断面。1つの窯を改修して使い続ける例。



B1区(第2次)窯跡確認状況。 並列する窯跡の検出状況。

SY12(12号窯)で学芸員の説明が行われている

























12号窯最終操業面

焼成部の床には瓦片を敷きつめ、炊口部付近の壁には瓦片を粘土で貼り付けて補強。手前には4面重なる床の断面。1つの窯を改修して使い続ける例。

さて、次の場所へ移動する



ここはSY6(6号窯)





















6号窯調査状況

古段階の窯の上層に新段階の窯の作業面が重なる。直列に重複する窯の例。

B2区



6号窯の最終作業面

須恵器・瓦片の出土は少なく、大ぶりの炭化物層の下には赤く被熱した面。最後は炭窯に転用されたい。

その他も見てみよう













B1区(第2次)窯跡確認状況。 並列する窯跡の検出状況。

さらにその他へ





もう少し奥へ行く









この辺りに瓦片が多量に散在していたのが発見の糸口だったとのこと













さて、退散することにする





辺りにはこんな供養塔もあった







新沼窯跡の文様瓦

南比企窯跡群

平成24年3月17日 発掘調査見学会資料

新沼窯跡(第2・3次)発掘調査

- 調査期間 第2次 平成23年6月1日～11月18日
第3次 平成23年11月21日～24年3月30日
- 調査主体 埼玉県比企郡鳩山町教育委員会

南比企窯跡群は、鳩山町の亀井地区を中心に、一部ときがわ町と嵐山町にかけて広がる奈良・平安時代の須恵器・瓦を生産した遺跡です。現在までに約500基の窯跡が確認されていますが、近年の調査成果からは総数1000基を超える窯跡が予想されます。ゴルフ場の造成に先立つ大規模調査では、窯跡以外に工房・粘土採掘坑もセットで発見され、国内でも稀有な「須恵器のムラ」として考古学会の注目を集めました。こうした内容から、南比企窯跡群は東日本最大、国内でも5本の指に入る規模の遺跡と言われています。

新沼窯跡は、この南比企窯跡群を構成する窯跡の一つで、その発見は古く江戸時代まで遡ります。本格的には昭和34年の立正大学考古学研究室による発掘で多数の郡名瓦が出土、武蔵国分寺の瓦を生産した代表的な遺跡として、学会では著名な存在でした。

新沼窯跡の調査概要

今回の発掘調査は、鳩山町が全国に誇れる文化財である窯跡群を保存活用する準備の一環として、平成23年6月から実施しているものです。

地権者のご理解・ご協力のもと、可能な限り表土を除去する方法で調査を進めたところ、当初は数基と想定していた窯跡が26基(重複も含めると29基)も確認されました。

注目されるのは、今回確認された窯跡が全て8世紀中葉～後半(奈良時代後半)の国分寺創建期で、須恵器と共に多量の国分寺瓦を焼いていたと判断される事です。つまり今回発見された26基の窯跡は、武蔵国分寺の瓦を造るために造られ、実質20～30年間の短期に集中して操業していたと考えられるのです。

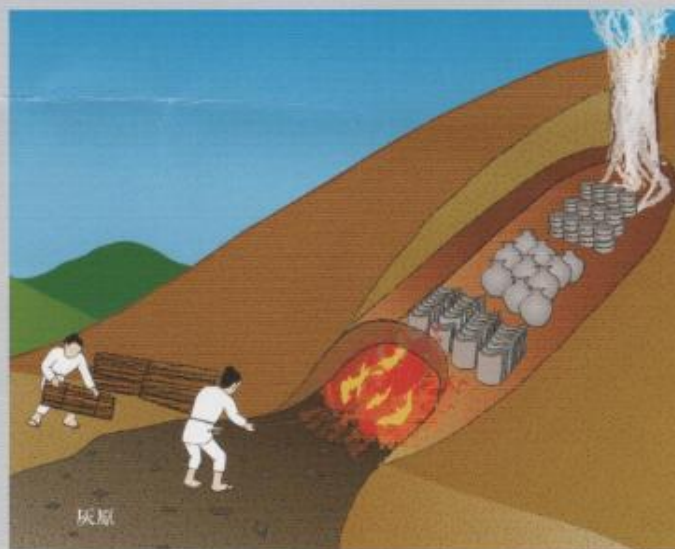
規 模

新沼窯跡で確認された26基の窯跡、これを全国の瓦窯跡と比較すると、国内最多24基の瓦窯跡が調査された香川県三豊市の史跡宗吉瓦窯や、同数の窯が確認されている茨城県石岡市瓦塚窯跡(常陸国分寺の瓦窯)を凌ぐ規模です。新沼窯跡は、その操業期間の短さも含め国内最大級の国分寺瓦窯と言うことが可能です。

窯の構造

確認された窯のうち構造が判明したものは全て地下式の無段、直立煙道をもつタイプです。この形態は鳩山の須恵器窯では一般的なものですが、逆説的に言えば新沼は須恵器窯をベースに瓦を焼いた窯場と言えます。

窯は使用に伴い天井の剥落が多少なりともあるようで、それを修理しながら最低でも数回は使用されたと推測されます。また、窯の内部を拡張し、焚口付近に段を設ける窯(SY12)もあり、須恵器窯で瓦を焼くための工夫として注目されます。さらに、天井崩落で使用できなくなった場合、潰れた窯を作業場にさらに奥の斜面を掘り抜いて築窯する窯(SY6)もあります。



操業時の窯(イメージ)

出土遺物の概要

出土した遺物は収納箱で約200箱もありますが、これは灰原と呼ばれる失敗品の捨て場を調査していない状態での量であり、それを含めた新沼窯跡の総遺物量は1万箱に迫るものと推定されます。

遺物の大半は瓦ですが、須恵器の出土量も多く、つぎ 坏・かめ 甕・ちようけいこ 長頸壺と言った一般的な器種以外にえんめんけん 円面硯やこうばん 高盤等もあり、窯構造だけでなく製品からみても新沼が須恵器窯をベースとしていることを窺わせます。

瓦には軒平瓦・軒丸瓦以外に、平瓦・丸瓦といった一般的な瓦、のし 鬘斗瓦や鬼瓦も出土しています。特に鬼瓦は絶対的に数が少ない象徴的な瓦であることを考えると、新沼窯跡が武蔵国分寺の瓦生産において重要な役割を担っていたと考える根拠となります。

なお、出土した瓦には、その生産にあたっての費用負担の証として、当時の行政単位である郡や郷を記したものが多く見られます。今回の調査だけでも、武蔵国21郡のうち13郡(秩父・児玉・嘉美・那珂・榛沢・播羅・男衾・大里・横見・高麗・入間・足立・豊嶋)、他に郷名として白方(豊嶋郡)・草原(埼玉郡)・麻羽(入間郡)・大井(久良郡か児玉郡)を確認しています。文字は押印によるもの以外にヘラで直接書いた瓦も多くあり、生産する場面に文字の書ける役人の存在を窺わせます。

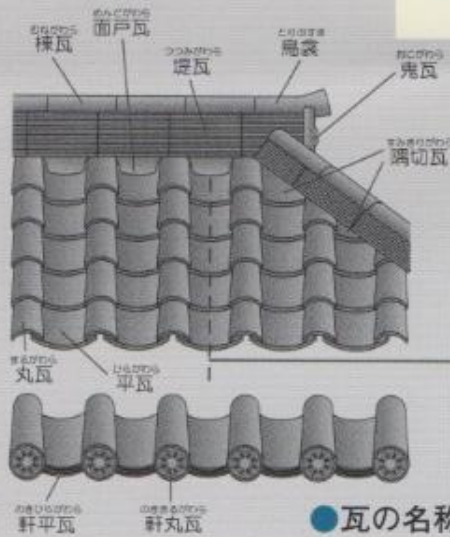




● 鬼瓦復元図



古代武蔵国と鳩山の位置



● 瓦の名称と使用場所



● 三次元測量

参考ホームページ

<http://www.saitama-np.co.jp/news03/14/03.html>

http://www.ranzan-shiseki.spec.ed.jp/?page_id=332





さて、以下の催しも行われていたので見学することにした。

第14回鳩山町文化財展

鳩山窯跡群




25年を過ぎて振り返る大発掘

平成24年
3月10日(土)~30日(金)

午前9時~午後5時まで ※開催期間中は無休

会場 鳩山町多世代活動交流センター2階
(鳩山町立図書館の南側・旧松栄小学校)
出土品展示室・美術展示室

入場無料



主催: 鳩山町教育委員会







窯跡郡成立以前(勝呂廃寺瓦の生産)



陶製仏殿/7世紀後半



陶製仏殿

▶石造イサノ山から平成5年に出土した陶製
 仏殿は、ちょうど同じ年に出土した三重県伊賀
 上野中の新羅の銅鏡（鏡子）で出土したもの
 とおなじく、出土品としては全国物にもきわめて数
 少ない稀少品です。両者ともアジビ補綴されま
 した。

▶陶製仏殿とは、仏像や経巻を納める筒子（仏
 舎）に仏舎を造る（造る）のことで、現存する最古の
 遺存物には飛鳥時代の仏舎寺の当山厨子（厨宝）
 があります。

▶本陶製仏殿の製作年代は7世紀後半です。こ
 の時代、天武天皇は仏教の興隆を促し、各地に
 仏舎を建てようとして「厨」を造りました（日本
 書紀）。この陶製仏殿もその一環として作られ
 たのではないかと推測されます。



頂蓋（上） 塔身（中） 基壇（下）

陶製仏殿

出土品名：陶製仏殿

を製織として採られた筈であったと思われる。そして、それにあたっては、東海地方から専門の工人を招き寄せ、一般庶民のほか、当時では特殊な仏具や地方ではまだ一般化しないなどの用途にあたるまでいたようであるが、合わせて船向けに軍需品の製造を行っていたようである。この教育を含む五箇堂跡は堀山堂跡群の母体となった筈である。



五箇堂跡の製織は、堀山堂跡群の母体となった筈である。この時代、大正天皇は仏教の興隆を期し、各地に仏教堂を建てた。五箇堂跡は、その一環として作られたのではないかと推測されます。



五箇堂跡の製織

国分寺瓦の生産(武蔵国分寺へ)



昭和59年3月～昭和60年12月に鳩山ゴルフクラブ造成に先立って発掘調査が行われた

第14回文化財展

鳩山窯跡群

25年を過ぎて振り返る大発掘





手前从小谷・柳原・広町道路

2012・3

埼玉県比企郡鳩山町教育委員会



■ 鳩山窯跡群の位置





国土地理院 1:200,000 東京・宇都宮を使用

例言

1. 本冊子は、鳩山町教育委員会主催の第14回文化財展「鳩山窯跡群—25年を過ぎて振り返る大発掘—」の展示パンフレットである。展示会は鳩山町多世代活動交流センター文化財展示室で開催し、その会期は平成24年3月10日～同30日である。
2. 展示会は平成23年度埋蔵文化財保存活用整備事業として文化庁の補助を受け開催したもので、昭和59年3月～同60年12月まで実施した、ゴルフ場造成に先立つ大規模発掘調査について特集した。
3. 展示会の企画と本冊子の編集は、鳩山町教育委員会生涯学習課文化財保護・町史担当主任の永井智教が行い、文化財専門員川又隆一郎と文化財専門補佐員原口由美子、文化財調査補助員渡邊あずさがこれを補佐した。
4. 本冊子の執筆は永井・川又が行ったが、8頁のコラムについては文化財調査補助員の平山美由紀が担当した。
5. 本冊子を編集するにあたり、「鳩山窯跡群」I～IV、鳩山町史編さん調査報告書第10集「鳩山の遺跡・古代窯業」、「国分寺市史上巻」、「新編埼玉県史資料編3」を参考とした。

はじめに

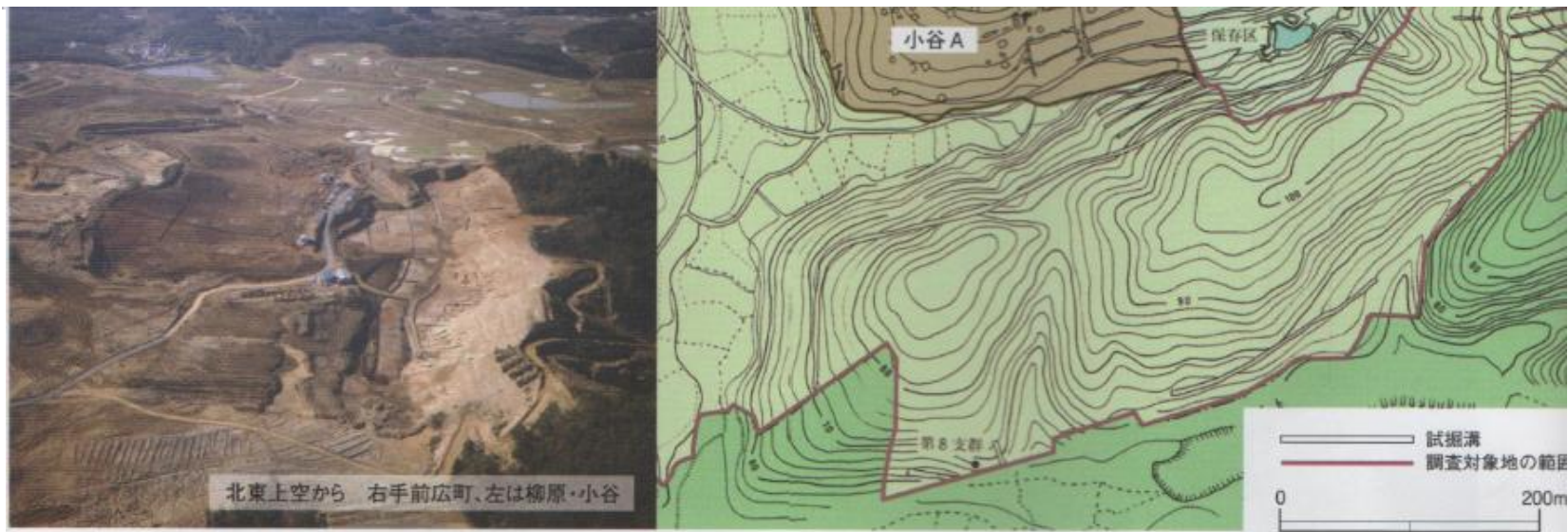
埼玉県ほぼ中央に位置する比企郡鳩山町周辺の丘陵地帯には、古墳時代～平安時代にわたる須恵器窯跡群として知られる「南比企窯跡群」が広がっています。この「南比企窯跡群」は、東松山市高坂地区の丘陵東裾で古墳時代後期初頭(5世紀末)に始まり、古墳時代末までは単発的かつ小規模生産で推移しますが、飛鳥・白鳳期に至って様相は一変、それまで丘陵裾に限定だった生産の場が丘陵内部に進出します。それは勝呂廃寺(坂戸市)の瓦生産を契機に丘陵内部へ入ると考えられており、以降、木の枝のように広がる谷筋に工房と窯場が多数設けられ、奈良・平安時代を通じて約200年間、古代のコンビナートさながらの世界が形成されます。これを「鳩山窯跡群」と呼びます。

ここに取り上げる「鳩山窯跡群」の発掘調査は、窯跡群全体の中では1割にも満たない面積ですが、ゴルフ場の造成という性格上、広大な範囲を対象としたものでした。専従する調査員5名、1日に動く作業員が最大200人以上という、今日では想像もつかない規模の大発掘の結果、窯跡だけでなく工房や粘土採掘坑がセットで確認されました。また、後の整理・報告によって示された成果は、特に須恵器の編年等、今日でも色あせることを知らないものです。今回は調査終了から25年を過ぎた節目に、その大発掘を振り返ってみたいと思います。



■ 鳩山窯跡群の全貌





調査直前の状況(正面に柳原、右は小谷左は広町)

■ 広町遺跡

- 所在地: 大字大橋字広町
- 時期: 縄文時代(早期)、奈良・平安時代、近世～近代
- 検出遺構: 奈良・平安時代(竪穴建物跡26軒、掘立柱建物3棟、土坑1基、水場4ヶ所、溝4条、須恵器窯跡18基、木炭窯跡1基、炭焼窯1基)
- 出土遺物: 縄文時代(土器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品)
- 丘陵緩斜面から裾部に広がる工人集落であるA地区と、急斜面下部に広がる窯跡のB地区からなる。中心となる8世紀中頃から後半には、国分寺瓦も生産している。また、木炭窯や鍛冶関連の遺構・遺物も注目される。



工房跡(A地区9号竪穴建物)



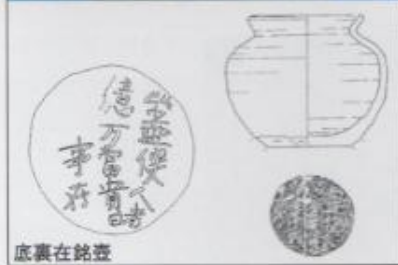


B地区全景



A地区全景

密集する窯跡(B地区12~14号窯)



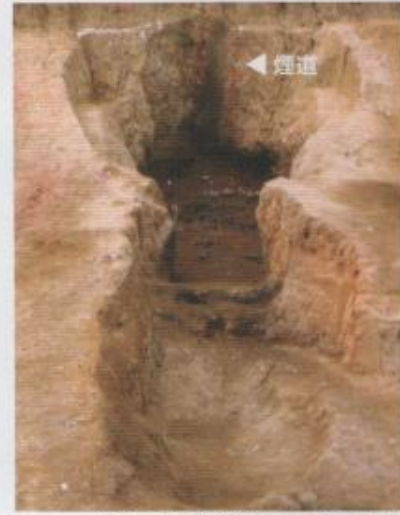
底裏在銘蓋

B地区3号窯の出土遺物



国分寺瓦

出土遺物



直立する煙道(B地区4号窯)

■ 柳原遺跡

- 所在地：大字大橋字柳原
- 時期：縄文時代(早期後葉～末葉、前期後葉他)、奈良・平安時代
- 検出遺構：縄文時代(土坑87基、礫群域1か所、炉穴2基、集石土坑2基)
奈良・平安時代(竪穴建物跡52軒、掘立柱建物9棟、土坑1基、瓦塔焼成土坑1基、溝13条、粘土採掘坑557基、須恵器窯跡3基、焼土址8基)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、瓦塔、石製品、鉄製品)
- 奈良時代の工人集落を主体とし、小支谷を挟んでA地区・B地区に分かれる。8世紀前半の成立期に竪穴建物跡(計16軒)が広範囲に展開し、工人集落の大本となる。集落中央の大規模な粘土採掘坑群は、鳩山窯跡群を象徴する遺構である。





粘土採掘坑と工人集落



群集する粘土採掘坑(B地区)



B地区15号建物跡周辺
(周囲に円形の排水溝を伴う)

工房跡様々



A地区9号建物跡

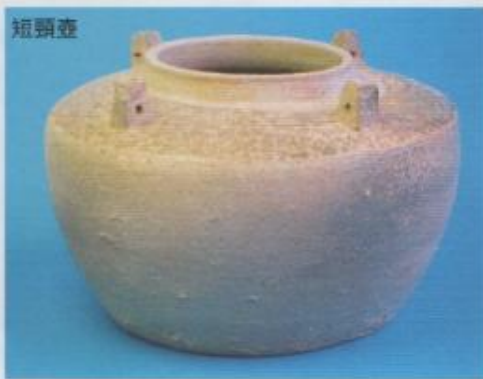


粘土を被覆
する甕片

工房跡からの遺物出土状態



香炉形



短頸壺

粘土採掘坑出土遺物

■ 小谷遺跡

- 所在地：大字大橋字小谷
- 時期：縄文時代(早期後葉～末葉)、奈良時代、中世、近世～近代
- 検出遺構：縄文時代(竪穴建物跡1軒、土坑10基、集石土坑3基、土坑址1基)
飛鳥末・奈良時代(竪穴建物跡44軒、竪穴状遺構4基、土坑15基、溝5条、焼土址14基、粘土採掘坑5基、須恵器窯跡15基、窯状遺構1基、木炭焼成遺構?4基)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器) 飛鳥末・奈良時代(土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品)
- 工人集落を主体とするA地区とC地区、それに付属する須恵器窯跡のB地区からなる。奈良時代前半を中心とし、国分寺瓦も少ないが生産している。なお、C地区における8世紀初頭の竪穴建物跡や竪穴状遺構は、勝呂廃寺の創建瓦の搬出に関連した中継地と考えられている。



A地区工人集落全景



B地区窯跡全景



軸木を粘土で固定

ロクロピットのある工房
(A地区27号建物跡)



C地区全景



須恵器片使用のカマド(A地区12号建物跡)



壁溝と外延溝(A地区29号建物跡)



A-5号建物跡



土製印章
(A-34号建物跡)



B-8号室跡



宝珠鏡
(C-4号建物跡)

出土遺物

■ 虫草山遺跡

- 所在地：大字大橋字虫草山
- 時期：縄文時代(早期末葉、前期後葉～末葉)、古墳時代初頭、奈良・平安時代、江戸時代
- 検出遺構：縄文時代(竪穴住居跡(早期2軒、前期6軒))、土坑20基、集石1基、
奈良・平安時代(竪穴住居跡14軒、土坑10基、溝2条)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器、装身具) 古墳時代(土師器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、石製品、鉄製品)
江戸時代(土器、陶磁器、銭貨、銅製品)
- 丘陵頂上部緩斜面に広範囲に広がる遺跡。縄文時代が主体だが、奈良・平安時代の集落は須恵器生産に関与した8世紀後半から9世紀前半の工人集落である。この工人集落で作られた須恵器は、同じ谷の出口に築かれた虫草山窯跡と考えられている。



全景



縄文時代の住居跡



出土遺物

■ 上鳴井1・2号窯跡

- 所在地：大字大橋字上鳴井
- 時期：平安時代
- 検出遺構：平安時代(窯跡2基)
- 出土遺物：平安時代(須恵器、瓦塔、石製品)
- 9世紀後半の窯跡。2基の窯跡はいずれも南比企窯跡群における衰退期に属する。



1号窯遠景



1号窯



2号窯



遺物出土状況(1号窯)

コラム

鳩山窯跡群における学史的発掘調査

鳩山周辺は古来より無数の瓦・須恵器片が散布し、“須江”などの地名も残る。さらに木材・粘土・水といった窯業に欠かせない素材が集約した環境でもあることから、江戸時代には古代武蔵国の主要な窯場として一部の研究者には知られていた。しかし今日のように注目されるようになったのは、昭和30年代の大学を中心とした発掘調査で窯跡群の実態が明らかとなり、古代窯業研究が進展したことに起因する。ここでは鳩山における窯跡の発掘調査の開始から、隆盛期の昭和30年代～40年代の調査までを振り返り、解明された窯跡群の実態と併せ、これら一連の発掘調査そのものの意義についてまとめておきたい。

鳩山で最初の発掘調査は、昭和6年の須江陶窯址(須江字北ノ谷)である。地元では県指定史跡となったと伝えるが、埼玉県庁の火災で当時の文書は失われ検証不可能である。現地には標柱があるが、その正確な位置も含め再調査の必要がある。昭和25年には今宿瓦窯址(赤沼字水穴前)が、稲村坦元・斉藤忠を担当に調査された。赤沼国分寺瓦窯跡として埼玉県指定史跡となったが、平成5年に国分寺瓦窯ではないことが明らかとなり、赤沼古代瓦窯跡と名称変更された。現地は土地所有者と地元有志が建設した覆屋によって保護され、鳩山の文化財保護の象徴として農村公園の一画で見学できる。



新沼窯跡(遺物出土状態)



宝蔵山窯跡

本格的な調査は、昭和32年の立正大学考古学研究室による能瀬ヶ沢窯跡(熊



山田窯跡



瓦疋影区(へら置人名瓦)金沢窯跡

井字能瀬ヶ沢)の発掘にはじまる。立正大学の久保常晴・坂詰秀一らによる南比企業窯跡群の計画的な発掘調査の一環として実施されたもので、能瀬ヶ沢窯跡の直前には旧玉川村亀の原窯跡群を調査している。翌34年には、江戸時代から「亀井村泉井窯址」として知られていた新沼窯跡(泉井字新沼)が、やはり立正大学によって調査された。ここでは大量の武蔵国分寺創建瓦が出土し、特に古代武蔵国の8割にも及ぶ郡名瓦も確認され、武蔵国分寺瓦生産窯として重要な生産拠点であったことが判明した。さらに立正大学による調査は翌35年の虫草山窯跡(大橋字虫草山)、36年の山田窯跡(赤沼字山田)・宮ノ前窯跡(奥田字宮ノ前)と続く。立正大学の他にも、昭和35年に早稲田大学(担当は滝口宏)、38年に大川清氏によって金沢窯跡(泉井字金沢)、39年には東京大学(藤本強ほか)によって小谷窯跡(大橋字小谷)の発掘調査が実施された。

これらの調査が実施された当時、学界の研究者たちの関心は専ら都城や古墳に向けられ、窯跡に限らず地方では発掘・研究もほとんど行なわれていなかった。しかし、この一連の調査やそれに基づく研究が相次いで発表されると、古代窯業研究のみならず、地域研究の必要性も叫ばれるようになった。南比企業窯跡群の発掘は地方史研究の発展に貢献したという意味でも意義のある調査であった。

以上町内における学史上の窯跡調査を概観したが、最後にこれらの発掘以前から旧制小学校で訓導を勤める傍ら、独自に研究を行なった小鷹健吾氏に触れておきたい。「古いものは小鷹先生に聞きなさい」と地域の人から頼られる存在であった小鷹氏は、耕作中に遺物が出土するたびに呼ばれては直接現地に赴き説明をした。勤務先の小学校では低学年のクラスを受け持ち、唱歌の授業や天

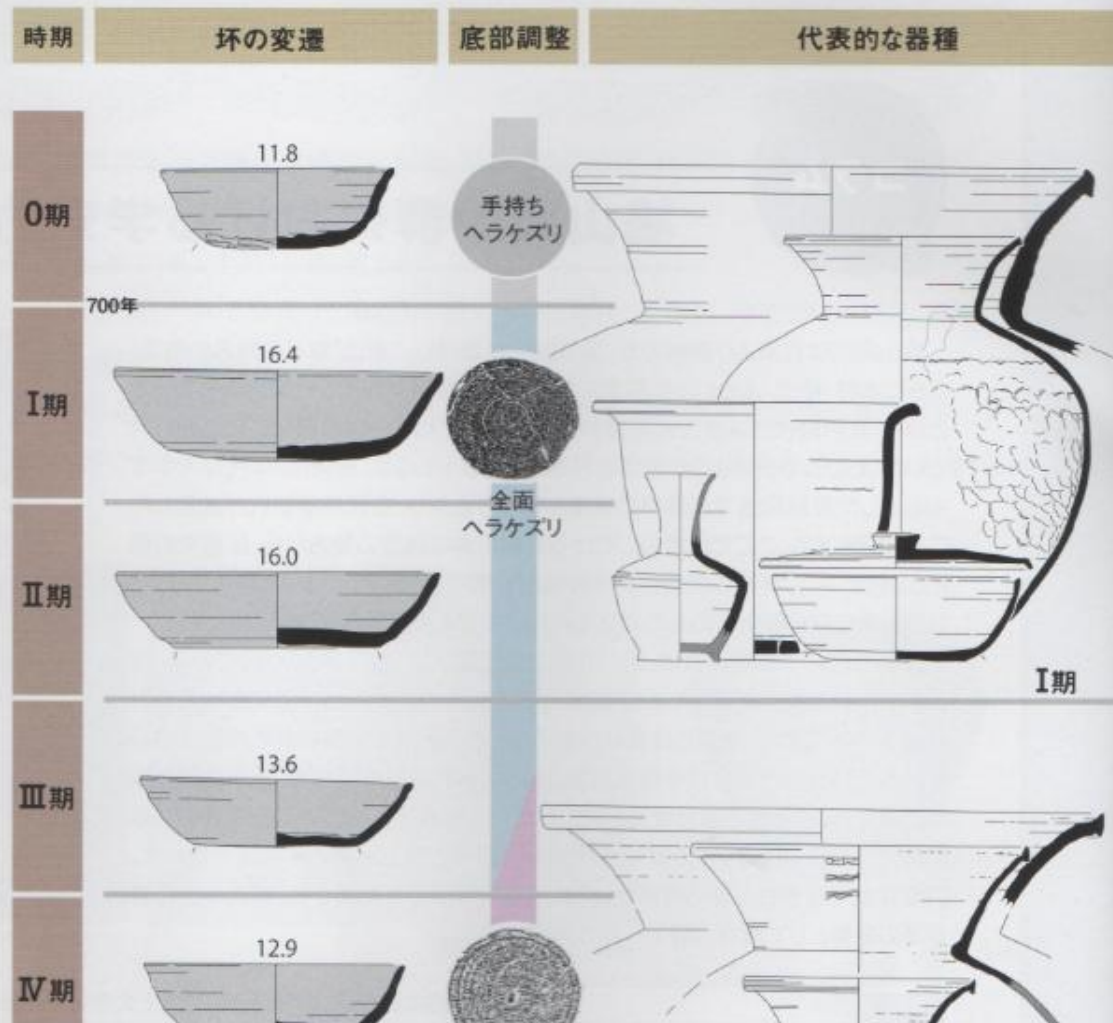
長節・紀元節などの行事の際には自らオルガンを弾きながら熱心に歌の意味を教え、拾った土器や瓦は学校で展示していたという(筆者の祖父母談)。そんな小鷹氏は鳩山が一大窯業遺跡として認知される以前から、旧亀井村周辺の窯跡の詳細な分布調査を行ない、その成果を「亀井村窯跡に就いて」としてまとめていたが、私家版であったため残念ながら学界に知られることはなかった。後に南比企業窯跡群の発掘・研究に取り組んだ坂詰秀一氏は、小鷹氏を南比企業窯跡群研究の先覚者とし、その功績を高く評価されている。

※写真は全て「新編埼玉県史資料編3」からの転載である。

《須恵器と窯構造の変化》

鳩山窯跡群において生産された製品(須恵器・瓦)は、形態や出土状態の検討によりI～IX期の都合9段階での移り変わり(変遷)で理解されています。これら段階には、国府や国分寺等で年代の明らかな資料との共伴例を根拠に年代が与えられており、時間の物差しとなるよう整理されています。

特に坏つぎ(当時の茶碗)は、シンプルな形態で生産量・出土量も多く、口径や底部の調整方法を指標にその変化が捉え易く、各段階の設定も坏を基準としています。坏はV期を境に観察のポイントが変わりません(0期は除く)。V期以前は口径の縮小化、V期以後IX期までは口径と底径の差によります。また、底部はI期以降最後



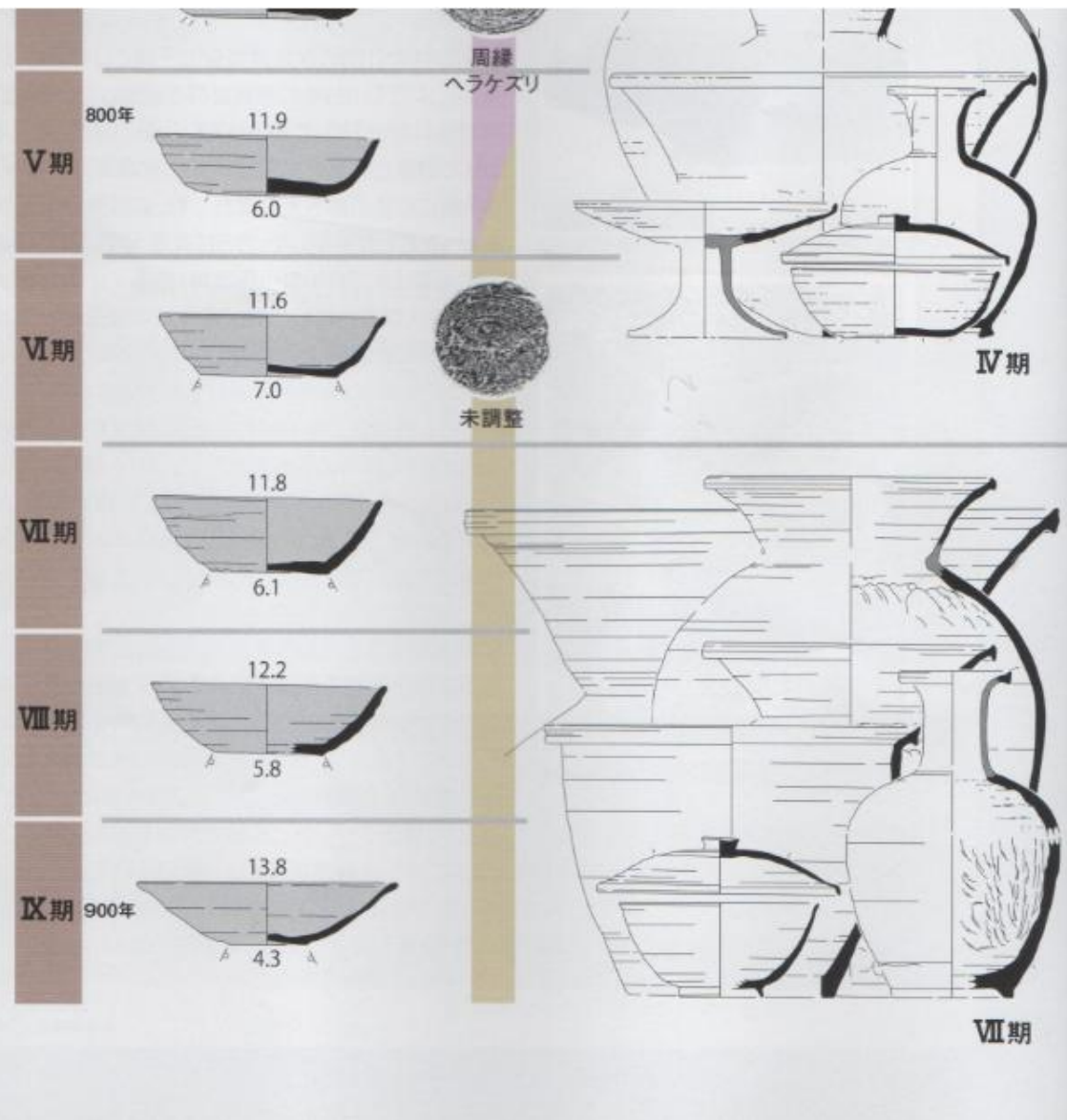
まで糸切りですが、Ⅲ期までは底部全面を回転ヘラケズリ、Ⅳ～Ⅴ期は底部周縁を回転ヘラケズリ、Ⅵ期以降は未調整で糸切りのままとっていくのです(右図参照)。

須恵器を焼く窯も、時期によりその形態は変化します。鳩山で最古と目される石田1号窯(7世紀後半・0期)は、地下式ですが煙道が水平気味に延び、その特徴的な構造から東海地方の工人の関与が想定されています。

8世紀前半～9世紀前半の最盛期は、7世紀と同じく地下式ですが煙道は直立するもので、規模も大形化します。

しかし衰退期である9世紀後半以降には半地下式となり、小形化していきます。

なお、2頁に示した窯跡群の展開模式図については、以上のような遺物や遺構の特徴を根拠としています。

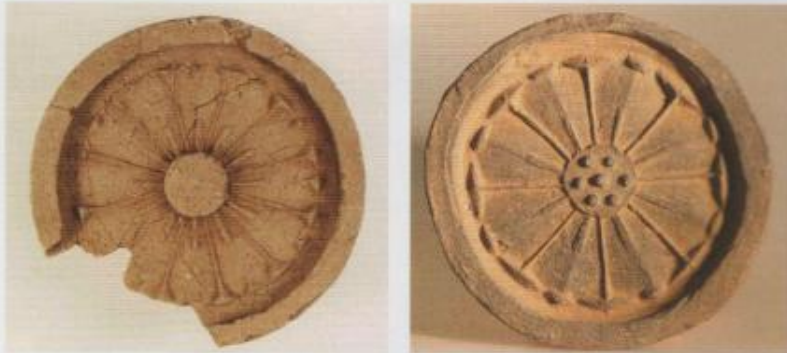


時期を代表する遺物

0～Ⅱ期



陶製仏殿(石田1号窯)



勝呂庵寺所用の瓦(赤沼古代瓦窯跡)

窯構造の変遷

石田1号窯(0期)



地下式

広町B11号窯(Ⅳ期)



Ⅲ期以降



武蔵国分寺に供給された瓦(新沼窯跡)



国分寺瓦に印刻された郡名(左:雷遺跡 右:新沼窯跡)



地下式・直立煙道

境田1号窯(Ⅲ期)



半地下式



鳩山 窯跡群



●編集 鳩山町教育委員会 〒350-0392 埼玉県比企郡鳩山町大豆戸184番地16 Tel 049-296-1211(代表)

●デザイン・印刷 アート・プラネット・ファクトリー